

第8回 万葉こども賞コンクール

【作文の部 最優秀賞】

秦野 桃子 さん

神奈川県在住 日本女子大学附属中学校3年

題材とした万葉歌

物部の 八十少女らが 汲みまがふ 寺井の上の 堅香子の花

卷十九 四一四三 大伴家持

舞台は越中。大勢の少女達が水を汲んでいる寺の井戸の傍らには、堅香子の美しい花が咲いていた。家持はこの雪深い越中にも訪れた春に対して、心の中に広がっていくささやかな喜びをこの景色と味わったのだと思う。

春というと華やかな印象が強いが、春の訪れは静かで繊細で、その不確かさがまた味わい深い。早春、入り乱れて水を汲む少女たちのまぶしく明るい雰囲気の中に、愛らしい堅香子の花が咲いていた。堅香子の花はかたくりの花のことで、紫色で小さく、先端にひとつだけ下向きに花を咲かせる。いかにも春を連想させるような姿でこそなく、上を向いて主張してきたりはしないけれど、そんなけなげで控えめな様子がまた上品で貴重なものに思えてくる。家持は、少女たちのいるにぎやかさの中でも、無言でひっそりとしたどこか物悲しいような花の姿に惹かれるものを感じたのだ。

実は四五〇〇首程もある万葉集の歌の中でこの堅香子の花が取り上げられるのは唯一この歌だけだ。誰もが目を向け気に留めるような、ありきたりな花ではないからこそ、彼が本当にこの花に何かを訴えかけられ引きとめられたのだということが伝わってくる。家持はこの堅香子の花の寂しげなさまに少なからず自分と近いものを感じたのだろう。大伴家持は様々な葛藤を生き抜いた人だ。強くあり続けながらも、心の奥に秘めていた孤独が歌にも表れていると思う。弱々しくも力強く耐えて咲いている愛らしい堅香子の花は、まるで彼自身の内面を映し出しているかのように、家持は見失って捉えられなかった自分自身を見つけたような気持ちになったのではないかと思う。

家持の心でこそ感じることできた春の訪れは、他の誰が感じることもできない絶妙なものだ。いつもと変わらないような日常の風景が少しずつ春に染められていく。その誰も気付かないような初めの一滴に彼は気付いたのだ。春が来たからといって生活に変化がもたらされる訳ではないだろう。けれど、日常がほんの少しだけ色付いていく。代わり映えなく続いていく日々の中の、ちよつとしたスパイスとしてこの春があればいい。ずっと明るい春ではなくても、日常の中に些細な楽しみを見つけて生きる、そんな生き方もいいものだと思う。